

# 日本の大学生の4年間の英語学習モチベーションの変化

小林 千穂（天理大学）

## 1. はじめに

モチベーションとは、学習の理由や目的、意欲・努力の大きさ、努力の持続という3つの要素に関わる概念であるが（Dörnyei & Ushioda, 2021）、3つめの要素、つまり「どれぐらいそれをやり続けるか」という問いは、言語学習モチベーションの分野ではあまり関心を集めてこなかった。しかし、言語学習の成功には学習者の長期的な努力が不可欠であるため、この3つめの要素についての検討が求められる。また、近年の言語学習モチベーションの分野で注目されている社会的・動的アプローチでは、学習者のモチベーションは一定ではなく、環境と相関的に反応し合いながら変動する「複雑で動的なシステム」（菊池, 2015, p. 23）であることが示されている。そこで、本研究では、2022年4月にある私立大学の英米語専攻に入学した44名の学生を4年間追跡し、彼らの英語学習に対するモチベーションや態度の推移を調査する。本研究は2026年の3月まで継続する予定であるが、本発表ではデータの収集・分析が終了している入学時と春学期終了時に実施した調査の結果を報告する。

## 2. 研究の目的

本研究では、学生の英語学習モチベーションや態度の4年間における変化とその理由をL2動機づけ自己システム論（L2 Motivational Self System）（Dörnyei, 2005）の枠組みに基づいて探る。本研究の具体的な研究課題は、①日本の大学生の英語学習に対するモチベーションや態度は4年間でどのように変化するのか、②日本の大学生のモチベーションや態度に変化をもたらす要因は何か、③日本の大学生のモチベーションや態度は彼らの英語力とどのように関係しているのかの3つである。

## 3. 調査方法

上記の通り、調査協力者は、2022年4月にある私立大学の英米語専攻に入学した44名の学生である。44名中男子学生が19名、女子学生が25名だった。入学前に1週間以上海外に滞在した経験があったのは6名のみだった。この44名の学生は、入学時にACE Placement Testを受け、その点数に基づきA, B, Cの3クラスに分けられた。全体の平均値は、300点中179.64（ $SD=40.45$ ）点で、各クラスの平均値は、Aクラスが225.47点（ $SD=21.23$ ）、Bクラスが175.53点（ $SD=10.95$ ）、Cクラスが134.93点（ $SD=18.08$ ）だった。

先行研究(Taguchi et al., 2009; Yashima, 2009)で使用された質問紙を基に、新たな質問紙を作成した。この質問紙は2つの部分から構成される。パート1は、英語学習への態度やモチベーションに関連する17の因子に分類される70項目を含み、それぞれの項目がどれくらい当て

はまるかを6段階の評価尺度を用いて評価することが求められる。この17の因子には、動機づけ、理想自己、義務的自己、家族の影響、道具的一接近、道具的一回避、言語学習に対する自信、英語学習に対する態度、海外旅行への志向性、英語に対する興味、英語使用への不安、統合的志向、文化に対する興味、目標言語のコミュニティーに対する態度、留学に対する態度、異文化間接近一回避傾向、海外の出来への関心が含まれる(付録1)。これに対し、パート2は、渡航経験、留学経験など、学習者の背景情報などを問う項目を含む。

質問紙を基に、インタビューガイドを作成した。このインタビューガイドは、英語を専攻することに決めた理由について問う1項目、自分の英語能力についての認識を問う1項目、英語学習に対するモチベーションや態度に関連する17の因子について問う17項目、入学後の授業での英語学習経験について問う1項目、入学後の授業外での英語使用について問う1項目、将来の目標について問う1項目、入学前の英語学習経験について問う1項目、大学生生活一般などについて問う1項目の24項目を含む。

調査協力者全員に、入学時と卒業までの各学期末に前述の質問紙を授業時に配布し、記入させる。記入に要する時間は10分程度である。また、44名の調査協力者の中から、性別や英語力を考慮して、約15名の調査協力者を選出する。この約15名の調査協力者を対象に、前述のインタビューガイドを使用して、40-50分程度の半構造化インタビューを課外で実施し、質問紙の解答のより詳細な理解を試みる。また、入学時には全員がAce Placement Testを受け、各学年の年度末に、全員がTOEICテストを受ける予定である。

上記の通り、本発表では、現時点でデータの収集・分析が終了している入学時と春学期終了時に実施した調査の結果を報告する。

## 4. 調査結果

### 4.1 英語学習に対するモチベーションと態度

データに欠損があったため、5名の調査協力者は除外し、残りの38名のデータを分析した。表1は、調査協力者の質問紙の回答の記述統計量をまとめたものである。入学時は、義務的自己、家族の影響、英語使用への不安、海外の出来事への関心を除くすべての因子の平均値が4以上だった。このことから、調査協力者が、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って入学してきたことが分かる。また、道具的一接近の平均値は高く、調査協力者が将来英語力を活かせる職業に就きたいと強く思っていることが伺える。

春学期終了後は、海外旅行への志向性、英語使用への不安を除くすべての因子の平均値が上昇した。中でも、理想自己、道具的一接近、英語学習に対する態度、英語に対する興味、総合的志向、文化に対する興味、目標言語のコミュニティーに対する態度、留学に対する態度、異文化間接近一回避傾向、海外の出来事への関心の平均値は、0.1ポイント以上上昇した。これは、1学期終了後、調査協力者の英語を使う自己がより明確化し、英語力を必要とする職業に就きたいという気持ちがより強くなり、英語学習に対する態度もより好意的になったことを示している。また、調査協力者の英語、英語圏の文化、コミュニティーに対する態度がより好意的になり、もともと強かった、留学をしたいという欲求がより強くなったことを示している。

調査協力者の英語学習に対するモチベーションや態度の変化量が有意であるかを検証するために、17因子のそれぞれについて、対応のあるt検定を行った。表2は、このt検定の結果をまとめている。t検定の結果、理想自己、道具的一接近、英語学習に対する態度、英語に対す

る興味、統合的志向、目標言語のコミュニティーに対する態度、留学に対する態度の7つの因子において有意差が確認された。また、文化に対する興味、異文化間接近一回避傾向の  $p$  値は有意水準に近づいた（それぞれ、 $p = .052$ ,  $p = .062$ ）。この結果は、調査協力者が入学後、英語学習に対するモチベーションや態度に関連する様々な面を向上させたことを示しており、記述統計の結果を裏付けている。

表1：英語学習に対するモチベーションと態度に関連する17因子の記述統計量

因子名	入学時		春学期終了後		増減	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
動機づけ	4.14	0.85	4.18	0.85	0.05	0.58
理想自己	4.16	0.99	4.28	0.96	0.12	0.36
義務的自己	2.97	1.01	3.04	1.12	0.07	0.40
家族の影響	2.80	1.19	2.89	1.17	0.09	0.40
道具的—接近	5.31	0.65	5.43	0.58	0.12	0.27
道具的—回避	4.63	0.85	4.65	0.88	0.03	0.40
言語学習に対する自信	4.52	0.67	4.59	0.71	0.07	0.30
英語学習に対する態度	4.49	0.94	4.80	0.81	0.30	0.47
海外旅行への志向性	4.96	0.87	4.95	0.83	-0.01	0.43
英語に対する興味	4.53	0.88	4.68	0.90	0.16	0.37
英語使用への不安	3.89	1.03	3.89	1.04	0	0.43
統合的志向	4.89	0.84	5.08	0.70	0.18	0.39
文化に対する興味	4.59	0.94	4	0.91	0.13	0.38
目標言語のコミュニティーに対する態度	4.87	0.91	5.03	0.93	0.16	0.36
留学に対する態度	4.83	1.29	4.99	1.20	0.16	0.44
異文化間接近一回避傾向	4.44	0.86	4.56	0.88	0.12	0.39
海外の出来事への関心	3.67	0.84	3.80	0.94	0.13	0.64

表2：英語学習に対するモチベーションと態度に関連する17因子の対応のある  $t$  検定の結果

因子名	$t$	$df$	$p$
動機づけ	-0.49	37	.628
理想自己	-2.10	37	.043
義務的自己	-1.11	37	.275
家族の影響	-1.32	37	.195
道具的—接近	-2.73	37	.010
道具的—回避	-0.41	37	.686
言語学習に対する自信	-1.48	37	.147
英語学習に対する態度	-3.98	37	.000
海外旅行への志向性	0.12	37	.902

英語に対する興味	-2.63	37	.012
英語使用への不安	0.00	37	1.000
統合的志向	-2.95	37	.006
文化に対する興味	-2.00	37	.052
目標言語のコミュニティーに対する態度	-2.67	37	.011
留学に対する態度	-2.23	37	.032
異文化間接近回避傾向	-1.93	37	.062
海外の出来への関心	-1.27	37	.212

#### 4.2 英語学習に対するモチベーションと態度の変化と維持のプロセス

インタビュー・データから、調査協力者の英語学習に対するモチベーションと態度の変化と維持の背景が明らかになった。習熟度別編成のすべてのクラスのほとんどの調査協力者は、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って英米語専攻に入学し、春学期終了後、英語学習に対する態度がより好意的になり、高いモチベーションを維持することができた。英語学習の目的や英語学習に対するモチベーションについて、AクラスのF、BクラスのD、CクラスのNは以下のように述べている。

入学時よりもモチベーションは高くなっています。入学時は、教師になりたいというだけでしたが、外交官セミナーを受けて、高いレベルに挑戦したいと思うようになりました。先輩や先生からも刺激を受けています。在学中に交換留学に挑戦したいとも思っています。大学は自由だし、自分が好きな英語がメインなので、大学生活には満足しています。家では、授業の準備やテスト勉強の他に、2ヶ月前ぐらいから単語を30分とか1時間ぐらい覚えています。(F; 男性, Aクラス) [春学期終了時]

ここでは、日本文化と英語を学んで英語教師になりたいです。半年ぐらい留学もしたいです。英語学習には意欲的に取り組んでいると思いますが、自分に合った勉強の方法を探しています。家では課題と3日に1回ぐらい、好きな歌を翻訳しています。一人暮らしを始めたばかりなので、まずは自分の人間関係を作りたいです。大学の授業は高校よりも専門的で楽しいし、授業中に教えてあげたり聞いたりして、友人と共有するのも英米語専攻らしくて楽しいです。(D; 男性, Bクラス) [春学期終了時]

得意教科というわけではありませんが、英語が好きです。大学ではたくさん英語を使って、英語力を伸ばし、留学もしたいです。環境に慣れるのに時間がかかり、これまでの大学生活には満足していません。良かったと思うことは、全部の授業で自分が使うためにやっていることが実感できた点です。絶対というわけではありませんが、英語を使う職業に就けたらいいと思います。授業の課題や復習をやったり、授業について行くのが精一杯で、TOEICやTOEFLの勉強はできていませんが、勉強は結構やっています。バイトのない日は大学に残って、多い時は一日に3時間ぐらい勉強しています。(N; 女性, Cクラス) [春学期終了時]

このように、ほとんどの調査協力者は、英語力に関係なく、4年間の学生生活に大きな期待を抱いて入学し、在学中に留学し、卒業後は英語教員などの英語力を活かせる仕事に就きたいという目標を持っていた。入学後も、授業や課外活動に意欲的に取り組み、クラスメートや先

輩などから刺激を受け、英語や英語圏の文化についての関心を深めていた。ただし、FやDの場合のように、実際には英語学習に多くの時間を費やしていないケースも多かった。

上記のように、すべてのクラスのほとんどの調査協力者は、英語学習に対する好意的な態度や高いモチベーションを維持することができたが、少数ではあるが、維持することができない者もいた。

大学生活には満足していません。やる気が出なくて休みが多いです。英語は専攻しなくても出来るので、英語だけでいいのかなと思ったりもします。今までは新しい環境に慣れるのに精一杯でしたが、最近では少しだけ、外部試験の勉強なども始めました。(J; 女性, Bクラス) [春学期終了時]

入学時と比べて、モチベーションは下がっています。バイトを始めて時間が取れなくなって、勉強ができていません。A大では、日本語の英語の授業が多いと感じます。大学の授業で充実感がないし、英語力は落ちていると思います。(K; 男性, Aクラス) [春学期終了時]

このように、少数の調査協力者は、新しい環境への不慣れ、英語を専攻したことに対する迷い、英語の授業に満足感が得られないこと、アルバイトに時間が取られたことなどのために、英語学習に対するモチベーションが下がっていた。

## 5. 考察

アンケート調査とインタビュー調査の結果を総合すると、習熟度別編成のすべてのクラスのほとんどの調査協力者は、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って英米語専攻に入学したことが分かる。英語が好きで、多くの場合、得意科目でもあり、大学でさらに英語を学べることにわくわくしていた。また、具体的な職業は決まっていなかった場合もあったが、ほとんどの調査協力者は、卒業後、英語を活かせる職業に就くことを強く希望していた。さらに、英語、英語圏の文化、コミュニティに対して好意的な態度を持ち、留学をしたいという強い希望を持っていた。

1学期終了後、ほとんどの調査協力者は、英語学習に対する高いモチベーションと好意的な態度を維持することができた。英語を使う自己をより具体的に描けるようになり、英語学習に対する態度がより好意的になり、英語力を必要とする職業に就きたいという気持ちがいよいよ強くなった。また、英語、英語圏の文化、コミュニティに対する態度はより好意的になり、留学をしたいという欲求はより強くなった。これは、社会的・動的アプローチを用いると、新しい環境に置かれた学習者が様々な外的要因の影響を受けたことにより、英語を使う自己像

(Dörnyei, 2005)を精緻化していき、その結果、高いモチベーションを1学期間維持することができたと解釈できる。ただし、上昇したモチベーションは必ずしも学習量の増加には繋がっていなかった。

このように、1学期終了後、ほとんどの調査協力者は、英語学習に対する好意的な態度や高いモチベーションを維持することができたが、他方で維持することができない調査協力者もいた。学習意欲高揚要因には、英語、英語圏の文化、コミュニティへの興味、英語授業への満足感、クラスメート、教員、先輩などの他者の影響、留学や将来のキャリアへの展望などが含まれ、他方、学習意欲減退要因には、新しい環境への不適応、部活動やアルバイトなどの他の

活動への関与、選択した専攻への迷い、英語授業への不満足などが含まれた。

なお、1学期終了後、ほとんどの調査協力者が英語学習に対する高いモチベーションと好意的な態度を維持することができたため、この時点では、英語力と英語学習モチベーションや態度の間には関係は見られなかった<sup>1</sup>。

## 6. おわりに

まとめると、英語を専攻する学生のほとんどが、英語力に関係なく、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って入学し、1学期終了後、彼らの英語学習に対する好意的な態度はより好意的になり、高いモチベーションは維持されることが明らかになった。これは、恐らく、新しい環境へのわくわく感がまだ持続しているためだと考えられる。しかし、時間の経過とともに、学生のモチベーションに差が現れることが推測される。英語力の着実な向上とそれに伴う自己肯定感の上昇が、彼らの今後のモチベーションの維持にとって重要になることが推測される。上昇したモチベーションが必ずしも学習量の増加には繋がっていないことを考えると、学生の授業内外における英語学習を促すための教員のサポートが求められる。

### 【引用文献】

- Dörnyei, D. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Dörnyei, D., & Ushioda, E. (2021). *Teaching and researching motivation* (3rd ed.). New York: Routledge.
- 菊池恵太 (2015) 『英語学習動機の減退要因の探求：日本人学習者の調査を中心に』 初版  
東京：羊書房
- Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 motivational self system among Japanese, Chinese, and Iranian learners of English: A comparative study. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds), *Motivation, language identity, and the L2 self* (pp. 43-65). Bristol: Multilingual Matters.
- Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds), *Motivation, language identity, and the L2 self* (pp. 144-163). Bristol: Multilingual Matters.

---

<sup>1</sup> この発表では結果を報告できなかったが、*t*検定を用いて、英語学習に対するモチベーションや態度をクラス間で比較したところ、入学時に1因子（海外の出来事への関心）に有意差が見られたが、それ以外には有意差が見られなかった。

## 付録1：因子と項目数

因子名	項目数	因子の詳細
動機づけ	4	学習者の英語に対する意図的努力
理想自己	5	学習者の理想自己の中で英語に対する側面
義務的自己	4	悪い結果を避けるために学習者がもっているべきだと信じている義務感や責任感などの特性
家族の影響	4	親が果たしている能動的、受動的役割
道具的一接近	5	お金を稼ぐ、よりよい仕事をみつけるなどのために英語の高いスキルを達成しようとするなどの個人的目標に基づく自己調整
道具的一回避	5	試験に合格するために英語を勉強するなどの義務感に基づく自己調整
言語学習に対する自信	4	学習者の言語学習に対する自信
英語学習に対する態度	4	身の回りの学習環境や経験に関連した状況に応じたモチベーション
海外旅行への志向性	3	学習者の海外旅行についての志向性
英語に対する興味	4	学習者の英語に対する興味
英語使用への不安	4	学習者の英語を話すことに対する不安
統合的志向	3	学習者の英語話者への好意的態度、英語圏文化の一員になりたいという気持ち
文化に対する興味	4	テレビや雑誌、音楽、映画などの英語圏文化に関するものへの学習者の興味
目標言語のコミュニティーに対する態度	4	学習者の英語を話すコミュニティーに対する態度
留学に対する態度	2	学習者の海外研修に対する意欲
異文化間接近一回避傾向	7	異文化背景をもった人と関わりを持とうとする傾向
海外の出来への関心	4	海外の出来事や国際問題への関心